

拝啓、転生者の皆さま
……頼むから世界をバ
グらせないでくれ

鴨山兄助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お願いだから自重してください By最高神

世界を見守る神様たちの、とある一幕。

異世界転生者は謎の舞を踊りがち。

※この作品はノベルアップ+、カクヨムにも掲載しています。

目次

拝啓、転生者の皆さま……頼むから世界
をバグらせないでくれ

1

拝啓、転生者の皆さま……頼むから世界をバグらせない
でくれ

ワシは八百万やおよろずの神々を束ねる最高神。

今日も今日とて、部下の神々と共に世界を見守っている。

……そして部下の尻ぬぐいもしている。

「はあ……」

ため息が漏れる。

最近、部下の気が緩んでいるせいか、手違いで人間を殺す事が多くなってきた。

それに比例して、異世界転生の件数も爆発的に増えている。というか、何人かは積極的に人間を異世界に送って遊んでいる。後で尻ぬぐいするワシの気持ちにもなりやがれ。

ストレスでワシの頭に白髪が増える。

異世界転生は、異世界に送ってはいお終い……では済まない。

転生先の世界に対するアフターケアが重要だ。なのに最近の若いもんときたら、後先考えずに異世界転生をしおる。

——ドドドドドドドドドド——

ほら、さっそく来た。

「助けてください、最高神様！」

「どうしたのじや、異世界の神よ」

涙目でワシの元に駆けこんで来たのは、まだ若い異世界の神だった。

担当世界を貰ってまだ日も浅い。さしずめ後先考えず異世界転生者を送りこんで、持て余しているのだろう。

「一体何をした。チートすぎる能力でも与えてしまったか？ それとも現地人の知能を下げ過ぎたか？」

どちらにせよ、やってしまったものは仕方がない。

ワシは尻ぬぐいをする為に、椅子から立ち上がる。

「そ、それが……異世界転生者を送り込んだは良いのですが」

「ふむふむ」

「転生者が、世界をバグらせました」

「……は？」

え、バグって……あのバグ？

ゲームとかである、あのバグ？

「そういうえばこの神が担当している世界って、そういう感じの世界じゃった。所謂ゲーム風世界。」

「いやいや、いくらゲーム風の世界とはいえ、そんなバグが発生するなんてあるか？」
「最高神様、バグはゲームの醍醐味です！」

「そんなところまでゲーム風にするな」

「何故こう、余計な箇所にまで力を入れてしまうのだろうか。」

「それで、世界がバグってどうなったのだ？」

「はい。転生者がバグと謎の舞を駆使して、転生から十秒でエンディングに到達しました」

「異世界転生にエンディングって何!？」

「ゲーム風ではあっても、ゲームそのものではないんだぞ！」

「なんでエンディングが用意されてるんだ!？」

「ゲームはエンディングを目指してなんぼですから」

「やかましいわ！ エンディング迎えたら世界終わるだろ！」

「大丈夫です。エンディング後のやり込み要素も完備してますんで」

「そういう問題じゃない！」

「頭が痛くなってきた。」

とりあえず聞くところによると、エンディングを無理矢理引きずり出した事で、世界そのものにバグが発生したらしい。その対処に困っているのだとか。

「なるほど、話はわかった……後はワシがなんとかするから、今後は気を付けるように」

さあ、世界の修正で忙しくなるぞ。

そう考えていた矢先、またトラブルが舞いこんで来た。

「最高神様あ、助けてくださあい」

「どうした、異世界の神（妖艶）」

「私の担当している世界があ、バグっちゃったんですぅ」

「お前もか」

「デカイ乳を揺らしながら泣きついてくる、異世界の神（妖艶）。

なぜこうも若者は世界をバグらせてしまうのか。

というかコイツの担当世界もゲーム風だったな。

「それで、お前の世界はどうなったんだ？」

「はあい。実は異世界転生者を送ったのは良いんですけどお、転生者君がこちらが想定していない挙動ばかりするんですよお」

「想定外の挙動？」

「そうなんです。謎の舞でアイテムを無限増殖させたりい、本来装備できない筈のア

「知るかああああああ!!」

「つーか何で中世ヨーロッパ風の世界に、機械があるんじやい！」

「それでえ、機械装備した転生者君が色々と無双しちゃってえ。あつという間にエンディングに到達しちやったんですう」

「だからなんで世界にエンディングを実装してるんだ」

「ゲーム風の世界ですからあ」

「ゲーム風を大義名分にするんじやあない！」

結局のところ、異世界の神（妖艶）が困っているのは、転生者がバグったせいで異世界のパワーバランスが崩れてしまったらしい。

で、ワシが尻ぬぐいをすると……ああ、胃が痛い。

「最高神しやまああああ！」

「……どうした、異世界の神（少女）」

号泣しながらやって来たのは異世界の神（少女）。

そういえば彼女の世界もゲーム風じやったな。

ああ……これ絶対トラブルだ。

「ふえええ、世界がバグりましたあ」

「予測可能、回避不可能」

「ふええええ」

何故こう、ゲーム風世界は軽率にバグるのだろうか。

誰が悪いのだ？ バグらせる転生者か？ それともバグを見逃した神か？

「それで、世界がバグってどうなったんじや？」

「ふええ、転生者を送ったら、転生者が謎の舞をし始めてえ」

「だからなんで転生者は謎の舞をするんだよ！」

「それでね、世界がバグってね。転生者が壁をすり抜け始めたんです」

「まあ、壁をすり抜けるくらいなら特に問題は——」

「それでね、ついには次元の壁まですり抜けはじめて……」

……はい？

「転生者が暗黒空間を移動し始めたんです」

「どういうことじや？ 暗黒空間？」

「四天王の部屋ですり抜けをしたら、暗黒空間に入っちゃったんです」

「いやだから暗黒空間ってなに？」

「暗黒空間は暗黒空間です。それ以上でもどれ以下でもありません」

訳がわからん。

「それで？ その暗黒空間に入った転生者はどうなったんじや？」

「えっと……それが……」

おどおどしだす異世界の神（幼女）。

その後ろから、冴えない顔をした一人の若者が現れた。

「こんちやーつす。ここつてデバッグルームですかー？」

「……え？」

「ふええええええ。こちら側の空間まで来ちゃいましたあ」

「なにしてんのオオオオオオオオオオ!?」

いや前代未聞だよ！ 人間が神々の領域に足を踏み入れるとか聞いたことないよ！

つーかその人間、へらへらしながら謎の舞を踊るんじゃない！

「あー、その君。ここはデバッグルームじゃないから。さっさと元の世界に帰りなさい」

「い」

「ちえー」

文句を言いながらも、素直に帰っていく転生者。

そしてやはり、謎の舞を踊りながら壁をすり抜けて行った。

部屋に残されたのはワシと異世界の神々。

「お前らなあ、もう少し自分の世界をきちんと管理せんか！」

「ですが最高神様、バグはこちらも想定外です」

「やかましいわ！ つーかなんで揃いも揃って、皆ゲーム風世界なんだよ！」

「今そういうのが流行りなので」

「流行りですからあ」

「ふええ、流行りだったから」

「流行り廃りで世界をクリエイトしてんじやねええええええ!!」

なんなのこいつら。神様としての自覚なさすぎなんじやないの？

いや、ちよつと待て。今こいつ等、ゲーム風世界を流行りと言ったか？

「……まさか」

聞こえてくるのは、こちらに向かって来る大量の足音。

もう嫌な予感しかしない。

「最高神様、助けてください!」「最高神様!」「最高神の親方!」「ちくわ大明神」「最高

神さまあ」「最高神の旦那ア!」

部屋に押しかけてくるのは、最近担当世界を貰った神々。

その誰もが、ゲーム風世界を創っていた。

「「世界がバグってしまいました!!」」

ああもう、本当にもう……

「転生者よ……頼むから世界をバグらせないでくれ……」

ワシの白髪と胃痛は、
増していくばかりだった。